

(3) 従来の教育システムが抱える限界と未来への危機感

① 「正解」を教えすぎて、子どもたちの「問い」が消えた教育

従来の教育は知識習得を成果の中心に据えてきましたが、正解偏重、多様性軽視といった問題が顕在化しています。このままでは子どもたちが未来社会に必要な力を育めず、可能性を発揮できない状況が続くこととなります。その問題とは、

ア 失敗を恐れる学びの風土

間違いを減点とみなし、正解のみを重視する評価システムは、挑戦や粘り強さを育む機会を奪っています。その結果として、失敗から学ぶ経験が乏しく、子どもたちは困難に直面するとすぐに諦める傾向が強くなっています。

【ここにフォーカス】

- 挑戦するより安全な答えを選ぶ傾向が強い状況が続いている。
- 「失敗から学ぶ」という成長の機会が教育から消えている。

イ 自ら考える習慣の希薄化

与えられた問いに模範解答を当てはめることが中心となり、「なぜそうなるのか」「別の見方はないか」と自分に問う習慣が身につけにくい状況です。

【ここにフォーカス】

- 模範解答を覚えることが「考えること」に代替している。
- 問いを生み出す力が身に付かず、探究心が萎縮している。

ウ 不確実な未来への準備不足

正解のある課題ばかりに慣れた結果、複雑に絡み合う問題点を整理し、自分なりの答えを創り出す力が育っていません。未来社会で必要とされる資質と教育内容に大きな乖離が生まれている状況が顕著に表れています。

【ここにフォーカス】

- 「答えがない課題」に挑む経験が不足し、意欲が続かない。
- 正解のない場面で思考が止まり、継続力が育たない。

② 「学び」と「社会」が分断され、知識が活用されない教育

学校教育が現実の生活や社会から乖離し、学びが教室内で完結している現状を解決すべき大きな課題です。この断絶により、子どもたちは知識を実践的に活用できず、未来社会に必要な課題対応力を十分に身につけられていません。

ア 学ぶ目的の不透明さ

教室で覚える内容が生活や将来と結びつかないため、「なぜ学ぶのか」を実感できてない。学習が単なる作業になり、主体的な学びにつながっていない。

【ここにフォーカス】

- 学びが「自分の未来」とリンクしていない。
- 学習が義務感だけで行われる傾向が強まっている。

イ 現実社会との接続不足

学校内で完結する授業は、実社会での協働や実践と切り離されています。知識を「使ってみる」経験が不足し、意欲や行動が身に付いていません。

【ここにフォーカス】

- 学校の外とつながる経験がほとんどない。
- 知識が「試験用」にとどまり、実生活で活かされない。

ウ 問題解決力の育成不足

知識を習得しても、それを活用して新しい解決策を生み出す機会を与えていないため、応用力の不足が顕著に表れています。

【ここにフォーカス】

- 知識を「答え」ではなく「道具」として扱えていない。
- 協働による課題解決の経験が極端に少ない。

③ 「個性」が埋もれ、多様性が尊重されない教育

画一的な評価や学習環境が優先されることにより、子どもたちの個性や多様な才能が顕在化しにくく、創造性や協働力といった社会に必要な力の育成が十分に行われていない状況があり、共働していく力が不足しています。

ア 一律の評価基準の弊害

点数や偏差値が価値基準として支配的であるため、リーダーシップや協働力といった特性が評価されにくく、多様な個性が埋もれ、子ども自身も自分の強みを発見できず、自身の個性を発揮できないまま育っている状況である。

【ここにフォーカス】

- 子どもの「強み」が数値の影に隠されている。
- 多様な価値基準が学校に存在していない。

イ 内面的成長の見落とし

学力だけに焦点が当たり、自己調整力や忍耐力、他者への思いやりといった内面的な成長が教育の成果として扱われていません。

【ここにフォーカス】

- 学力以外の力が教育の成果として可視化されない。
- 内面的な力の成長が「評価不能」として軽視されている。

ウ 多様性への対応の遅れ

急速に進むグローバル化や価値観の多様化に教育が追いついていません。他者を理解し受け入れる経験が不足し、壁を作る傾向が強くなっています。

【ここにフォーカス】

- 異質な相手と関わる経験が不足している。
- 多様性を価値として認識する教育が根付いていない。